

流域周辺の集落における神社、聖地の配置関係 —長崎県対馬市上県町佐護を例として—

中谷研究室 千年村研究ゼミ 1X21A014 安藤優花

目次構成

- 【序論】
- 第1章 本研究について
 - 1-0 研究背景
 - 1-1 研究目的
 - 1-2 研究方法
 - 1-3 既往研究
 - 1-4 本研究の位置付け
 - 1-5 語の定義
- 【本論】
- 第2章 対馬の概要
 - 2-0 はじめに
 - 2-1 対馬の概要
 - 2-1-1 環境的特質
 - 2-1-2 産業的特質
 - 2-1-3 歴史的特質
 - 2-2 対馬の信仰の概要
 - 2-2-1 天道信仰
 - 2-2-2 天道地とシゲ地
 - 2-2-3 亀ト
 - 2-2-4 大和との関わり
 - 2-3 小結
- 第3章 天道信仰の歴史
 - 3-0 はじめに
 - 3-1 古代
 - 3-2 中世から近世
 - 3-3 小結
- 第4章 佐護川流域の信仰と集落の分析
 - 4-0 はじめに
 - 4-1 佐護川流域について
 - 4-1-1 調査対象地：佐護川流域について
 - 4-1-2 上流集落と下流集落について
 - 4-1-3 調査対象地選定の理由
 - 4-1-4 佐護川流域の天道信仰について
 - 4-2 分析手法について
 - 4-3 古代の佐護
 - 4-3-1 上流
 - 4-3-2 下流
 - 4-4 中世から近世の佐護
 - 4-4-1 上流
 - 4-4-2 下流
 - 4-5 近代の佐護
 - 4-5-1 上流
 - 4-5-2 下流
 - 4-6 現代の佐護
 - 4-6-1 上流
 - 4-6-2 下流
 - 4-7 神社と寺の年表
 - 4-7-1 上流
 - 4-7-2 下流
 - 4-8 小結
- 第5章 考察
 - 5-0 はじめに
 - 5-1 調査集落のまとめ
 - 5-1-1 遺跡の連続性
 - 5-1-2 集団の連続性
 - 5-2 天道信仰と集落の考察



図1 長崎県対馬市

序論

第1章 本研究について

1-0 研究背景

近年、廃神社、廃寺が多いことが問題になっている。原因としては資金不足、社会変化による祭祀、信仰への興味の低下などが考えられる。また、祭祀にかかわる人が減ったことも原因である。対馬での祭祀空間を研究した鈴木は天道祭祀が最も盛んだった中世の祭祀空間を分析しているが、現在の佐護全体での天道祭祀が崩壊した後のことは考察されていない。本研究は、対馬市上県町佐護を対象に古代から現代までの歴史的変遷を見ていくことで、現代では崩壊した佐護全体での天道信仰の祭祀が集落においてどのような役割を持っていたかを主題とする。

1-1 研究目的

集落と信仰の変容の一般性を見出すことを目的とする。今回調査する対象を長崎県対馬市にある天道信仰とした理由は主に次の二つである。

- ・対馬固有の信仰で古神道の形を残すものであること
- ・天道信仰は、永留久恵の説によると原始の自然信仰であった日ノ神信仰、山岳信仰に、農耕文化に伴う穀霊信仰と、王権神話の天童伝説とが複合し、さらには仏教と複合し、修験道の影響をも受けたものと考えられている。つまり、天道信仰は時代によって様々な変化を経たものであることがわかる。文献調査、佐護川のフィールドワークを通じて佐護川流域の天道信仰の信仰の形と集落構造との結びつきを調査し、分析する。

1-2 研究方法

第2章 対馬の概要
【2-1】で対馬の概要、【2-2】で対馬の信仰の概要を説明する。

第3章 天道信仰の歴史
対馬の集落の分析をする準備段階として、天道信仰の歴史を古代から近代まで確認する。

第4章 佐護川流域の信仰と集落の分析
前章で示した対馬の天道信仰の中心地であった佐護地域について信仰と集落についての分析を行う。具体的には【4-1】で、佐護地域の概要について示し、【4-2】で分析手法について明示する。【4-3】から【4-6】で、上流、下流の動きの変遷を分析し、【4-7】で神社・寺の年表の確認をする。

第5章 佐護川流域の信仰と集落の考察
【5-1】で調査集落のまとめを行い、【5-2】で、天道信仰と集落の考察を行う。

第6章 結論
本論の分析や考察をもとに結論付ける。

1-3 既往研究

・「祭祀と空間のコスモロジー—対馬と沖縄」鈴木正崇 2004 春秋社 菊版 616頁
本書は集落の祭祀に注目し、文献調査、実地調査のヒアリングなどで空間的な読解をし、集落の人々がどのように生きているのかを明らかにしている。
対馬にある6つの集落の調査を行っていて、佐護湊についての祭祀の伝承や神社、聖地と集落空間について分析している。

・過疎山村における講集団の変化と村落社会 島根県仁多町阿井地区の事例」中條暁仁
本論文対象集落の近年の人口減少を示し、時代を三つの区分に分け、信仰集団の機能の変化を社会変動などから検討している。

1-4 本研究の位置付け

古代、中世から近代の祭祀の状況など天道信仰が盛り上がっていた時代の研究は存在するが、近世から現代でその集落において天道信仰はどのような役割を果たしているのか、どのような変遷を経て現在のような姿になったのかを調査しているものはあまりない。

本論

第2章 対馬の概要

2-1 対馬の概要

地形は山地が多く、平野に乏しい。産業は主に漁業、林業、観光業が行われる。農業は少ない。歴史的特質は国境にある島なので、外国との交流、交易が盛んだった。

2-2 対馬の信仰の概要

天道信仰:天道信仰は対馬固有の民俗信仰である。対馬全土に広がっており、その中心地は佐護と豆鼓である。中世に神仏習合によって生まれた宗教の一つであり、元は日神崇拜、穀霊崇拜、祖霊崇拜を核としたもの。
天道地:磐座、神籬の形をしている天道信仰の聖地。
亀ト:亀の甲羅を用いて吉凶を占う儀式。
大和との関わり
①対馬固有の神々が畿内にわたって祀られた。
②対馬のト部が大和朝廷の亀トをしていた。
③対馬の祭祀状況が記紀神話と対応している。

第3章 天道信仰の歴史

3-1 古代

原始のころ、神はあらゆるものに宿り、目に見えないものと考えられていた。人々は神の依り代として山、岩、樹木、泉などを崇拜していた。弥生時代になると、対馬では日神、祖霊、穀霊が重要視され、これらの信仰を核とした天道信仰が形成された。
古墳時代(四世紀)では、対馬固有の神々が祭られた。また、亀トも行われていた遺跡が残っている。
飛鳥時代には対馬固有の神々が大和に上京し、高皇産霊神になる。また、対馬の古族、ト部などが高皇産霊神、太祝詞神の祠官として召喚された。平安時代に対馬に仏教、道教などが伝わり、天道関係の伝説に天道法師のほかにも、天道童子、天道菩薩などの逸話ができ始める。

3-2 中世から近世

中世、特に室町時代では天道信仰が「対馬神道」と呼ばれるほど盛んだった。また、対馬の寺院は中世に創建されたところが多く、仏像が安置されている。永享12年(1440)、天道女体宮(女房神)の神像が造頭される。天道縁起にさらに多くの異伝が加えられた。
豆鼓では亀ト、赤米の田植えと神事など近代まで多くの中世の祭祀が残っていた。

第4章 佐護川流域の信仰と集落の分析

4-1 佐護川流域について



図2 対馬市佐護の6つの集落

今回は長崎県対馬市上県町佐護の佐護川流域を対象として調査をする。佐護は佐護川流域にある深山、仁田内、恵古、井口、友谷、湊の六つの集落から構成されている。
今回、対象地を対馬市上県町佐護にした理由は天道信仰の中心地として豆鼓・佐護があり、そのうちの一つの地域だからである。

4-1-4 佐護川流域の天道信仰について



図3 佐護の5つの天道地

佐護の天道地は二つあり、中でも湊と恵古の天道地の近くには式内社があったため、中世では二つの集落を中心として天道祭祀が盛んだった。

4-3 古代の佐護

4-3-1 上流

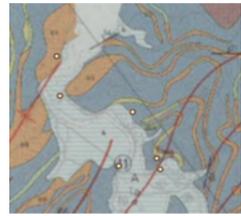


図4 上流の地質図と遺跡

図5 上流の遺跡(古代)

●地質、地形による位置分析
古代(弥生時代、古墳時代)の遺跡の配置を見るとほとんどが対州層郡と沖積低地堆積層の境界に位置する。
このように環境や地形によって神をまつる位置や集落の位置を決めていたことがわかる。

4-3-2 下流



○ 遺跡
● 天道地

●地質、地形による位置分析
遺跡が出土している場所は沖積低地堆積層（水色の縞模様の部分）と対州層部 泥岩・砂岩（青色とオレンジ色）の境界に位置している。このことから、古代から佐護川沿いに集落を作っていたと考えられる。

クビル遺跡、ゴンクマ遺跡の立地は山道を登って約30mの場所にある。これらが山の上のほうで見つかったのは友谷が古代には海でこの遺跡の位置が岬であったからである。

図6 下流の地質図と遺跡

図7 下流の遺跡(古代)

4-4 中世から近世の佐護

- 主な出来事
 - ・中世は天道信仰が最も盛んで、平安時代に始まった神仏集合による寺院がたくさん創建される。
 - ・式内社 天諸羽神社ができる。
 - ・それぞれ式内社を持っている上流の恵古、下流の湊を中心に佐護全体で開催される天道祭祀が行われる。
 - ・天諸羽神社の宮司である寺山氏が天道の祭りを主催し、深山集落の女性が神樂を奉納して、湊集落の天神多頭魂神社まで盆踊りを見に行っていた。

- 天道地（現天諸羽神社の森）で寺山氏による亀トが行われる。（明治4年まで続く）

- 位置分析
佐護全体で天道の祭祀を主催し、ほかの村の人々を天道山のふもとにある天神多頭魂神社まで招いていたことは「天道信仰」という共同体が人々をまとめていたことがわかる。

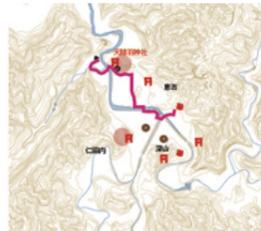
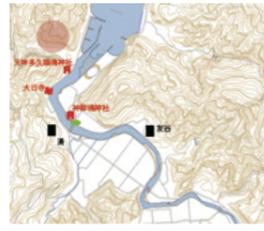


図8 中世から近代の下流

図9 中世から近代の上流

第5章 考察

5-1 調査集落のまとめ

5-1-1 遺跡の連続性

- 文献調査や実地調査より上流、下流集落に共通する点の1つ目としては、
- ・集落の場所は環境による制約を受けながらも、古代からの連続性がある

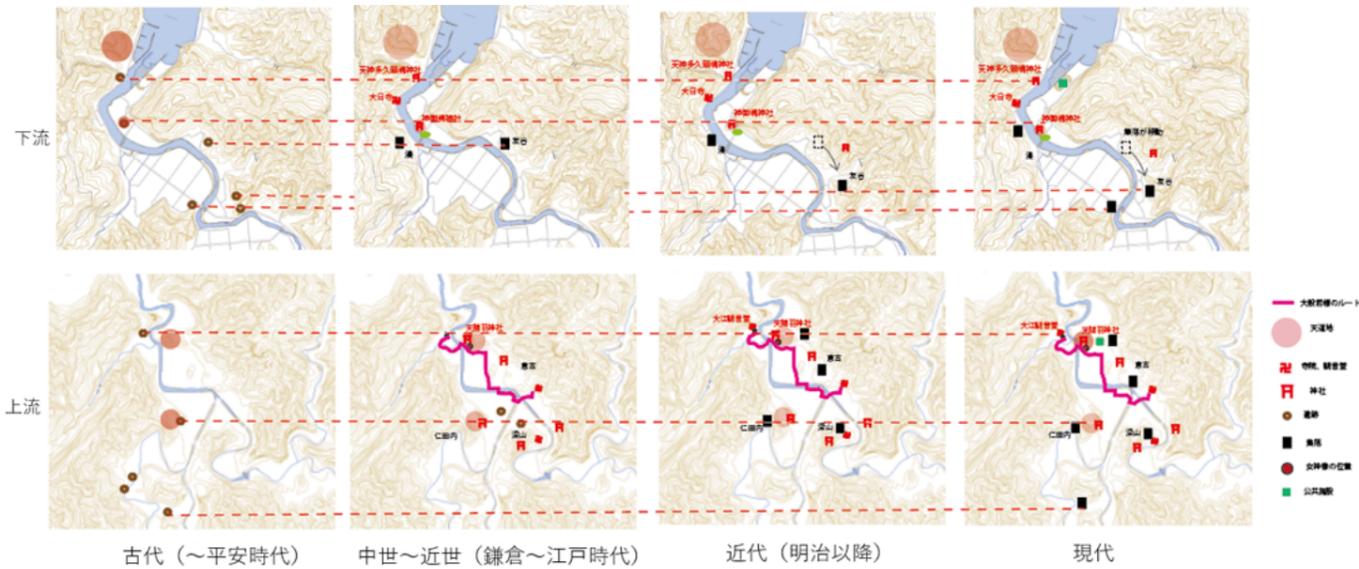


図10 神社、集落などの配置図

出典・参考文献

出典

- 出典・参考文献
- 図1、図2：QGISより引用、加筆
- 図3：地理院地図より引用、加筆
- 図4：国土交通省5万分の1土地分類基本調査 表層地質図を引用、加筆
- 図5：地理院地図より引用、加筆

- 図6：国土交通省5万分の1土地分類基本調査 表層地質図を引用、加筆
- 図7～11：地理院地図より引用、加筆
- 図12：筆者作成

参考文献（主要なもののみ）

- ・永留久恵 (2001) 『海童と天童』 大和書房
- ・鈴木正崇 (2004) 『祭祀と空間のコスモロジー』 春秋社
- ・宮本常一 (2009) 『私の日本地図15』 吉崎
- ・対馬紀行』 未来社
- ・永留久恵 (2009) 『対馬国志第一巻 原始・古代編』 昭和堂

5-1-2 集団の連続性

共通する点の2つ目は、公共施設が下流の湊集落で天道地とされていた天道山の近隣に出来ていることから、中世から近世にかけて天道祭祀は崩壊したが、人々が集まる場所としての連続性は確認できる。

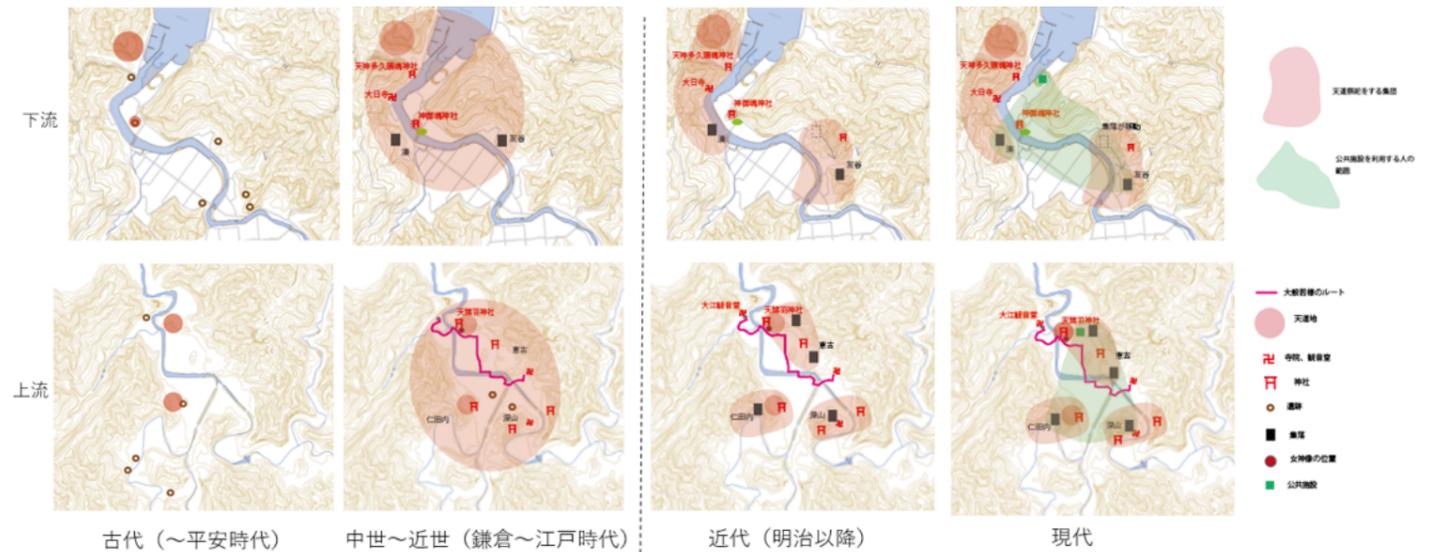


図11 天道祭祀にかかわる人の範囲の図

下流の遺跡は現在も集落や神社になっているが、上流は八幡檀石棺群、八幡遺跡の場所が近世には集落や神社などが存在していない。二つの遺跡については18世紀前半に佐護川の氾濫を防ぐために、川筋の変更が行われたことが考えられる。

5-2 天道信仰と集落の考察

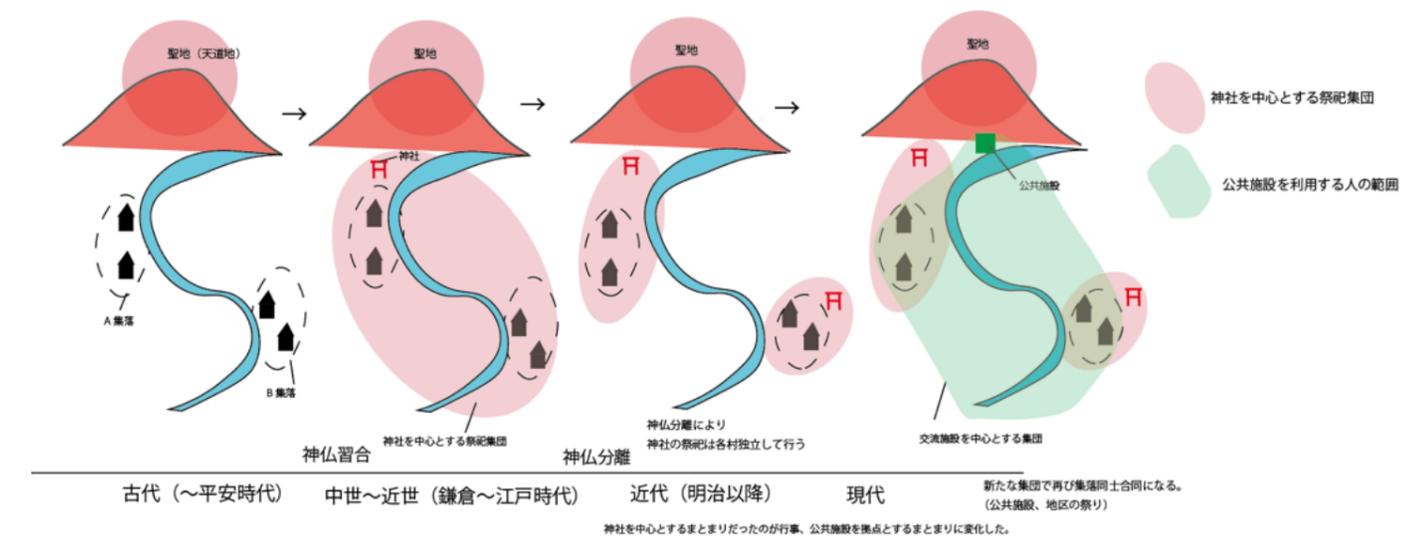


図12 天道祭祀にかかわる人の変遷図

第四章の分析で、公共施設の場所が中世で中心だった二つの拠点の場所になっているのを示した。中世で、下流の湊と上流の恵古はそれぞれ天道地の近くに式内社ができ、そこを中心とした佐護地区全体の天道信仰の祭祀が行われていた。中世から近世に移行する際に神仏分離があったため、佐護地区全体の天道祭祀は崩壊し、各集落で独立して天道信仰の祭祀が行われるようになったため、佐護全体での人々の交流はなくなった。しかし、近世になり、湊、恵古の天道地の近くに公共施設ができ、佐護地区全体で参加できる祭りの会場と地域の交流施設になった。このことから、集落は災害などによって形を変えるが、信仰の中心地は持続していることがわかった。聖地の場所に集まるという形は残っているが、まとまりの中に信仰の要素は消失した。